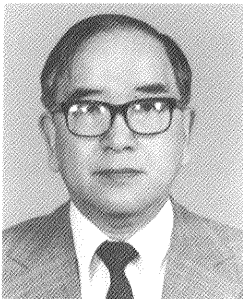


The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPI News Letter

Spring 2001 No.15

学歴と見栄



学歴とはある人が1つの教育課程を修了したことを裏書したものであって、必ずしもその人が学歴を持たない人以上に能力又は素養を持っているとは言えない。しかし東洋の社会、特に台湾では必要以上に学歴を過

大評価しその結果、社会的に浪費が見受けられる。例えば、どの家庭でも経済力が許す限り子供が幼稚園か小学校の頃から名門校を目標に子供達を無意義な試験地獄に追い込み、入学試験と関連のない学課は往々として疎かにされ、家における雑務も親たちが全部担い、こうして育った子供は所謂「書呆子」(学問馬鹿)となり、社会に出ても思考力に欠け、苦しさに耐えることが出来ない人になりがちである。一番痛感する事は高学歴を追求する為に何年も浪人し、一生のなかで最も想像力と創意力に富む若き歳月を入試の為、学位の為に浪費する事である。欧米では25か26歳で博士学位を修得し、早速思考力、想像力の最も盛んな歳月を本格的な仕事場で発揮出来るのに対し、台湾や中国ではその学位を取る為に30～35歳まで学生として学校に留まっている数多の例を見ると心苦しくなる。企業あるいは世の中に存在する職業は必ずしも博士号を持った人がふさわしいだろうか？ 答えは無論否定であるが、学歴に迷信する社会では往々にして極端に走り勝ちである。例えば台湾では一時期内閣の部長級(大臣級)の職位の半数以上が博士学位を持っている事で有頂天になり、それを報道していたのを思い出す。甚だしい例に至っては、ある機構では所長級の職位に学位がなければ更迭されたという極端な例があった。高学歴を持

つ事はマイナスではないが決していかなるケースの必要条件でもなく充分条件でもないという事実をわきまえるべきと思う。逆に個人の人生における必要以上の歳月を学位のために潰す事は時間的浪費であり、鋭い創意力に富む若き歳月を生涯の本場に使えなかった損失は大いになげかわしい。

五年位前に豪州のメルボルン大学を訪問した時、オーストラリアの化学工学の生徒達は大学部を終えた後、大部分の学生は社会に出て早く自分の生涯を拓げる途に進む事を選んでいる。本当に学術あるいは技術研究に興味を持った約一割の学生だけが大学院に進み、三年位で博士課程を終え充分鋭気の一番盛んな時に個人の仕事の本場で能力を淋漓に発揮出来る環境がとても羨ましく思われた。

見栄にとらわれ徒らに高学歴を追うより、如何なる時も周囲より不断に学ぶ能力と個人の人生観に適応した伸び方に生きていくのが人としては幸福でなかろうか？



国立台湾大学教授

呂維明

2001年 第1回行事 見学・講演会報告<サッポロビール千葉工場>

晴天に恵まれ2001年、第1回行事企画、「ビール工場燃料電池見学と飲料水用水処理講演会」が2月21日千葉県船橋市のサッポロビール(株)千葉工場で開催された。見学は燃料電池設備とビール工場、それとピオトープ園の3ヶ所、講演2題を含め約3時間40分、密度の濃い内容でした。さらに、見学後、生ビールを試飲できるとあって?参加は46名と定員をきっちり満たしていた。



日立プラント建設(株) 大熊氏

工場の正門を入り、右手にサッポロビール園、その奥にあるマリンハウス二階に案内され、道田工場長から13年前恵比寿から千葉に移転してきた説明があった。そう言えば、正門に入って大きなビア樽に恵比寿工場と表示されていたのが不思議でしたが、工場長の説明で理解できた。

さて、講演1は日立プラント建設(株)大熊那夫紀氏の「飲料水用水処理技術」で膜利用の飲料水処理システムの日本と世界の現状、比較、将来展望がデータとともに説明された。現在、日本は上水道の高い普及率96%と水道水が飲める安全性により膜利用はわずか8万t/day(国内総給水量の0.2%にも満たない)であり、世界(米国、EU)は安全な水(水中の有機物・硬度成分の除去、塩素殺菌の排除)の欲求から、膜利用は492万t/dayとなっている。世界最大の浄水場はクリプトスポリジウム除去を目的にUF膜を用いたイギリスの16万t/dayであることが説明された。今後、日本も、よりおい



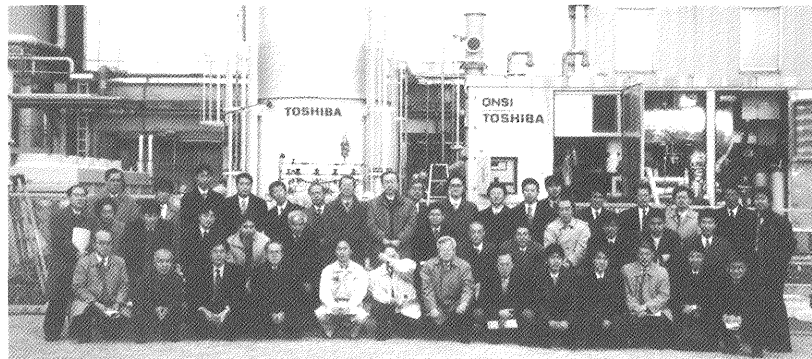
サッポロビール(株) 斎藤氏

しく安全な水の要求から膜利用の水処理施設が増える傾向にあることが理解できた。

講演2はサッポロビール(株)千葉工場 エンジニアリング部副部長 斎藤雄二氏から、民間では世界初の「燃料電池システム」の導入経緯、システム設計、設置運転状況の説明と非常に興味深い内容であった。何故、燃料電池を導入しようとしたのか、それは昭和63年にサッポロビール(株)が船橋市の京葉食品コンビナート内に工場を建設、年々生産量を増加(排水量も増加)、平成8年より排水負荷対策として、嫌気性菌による排水の一次処理(最終はKYU処理)と、嫌気性処理過程で発生するバイオガスの活用(通常はメ

タンガスをサーマルリサイクルとして燃料ボイラで蒸気や温水へ変換し、熱エネルギーとして回収)方法を合わせて検討した結果、バイオガスを燃料(実際には天然ガスとの併用)として環境に優しい燃料電池の採用と、先進性機器として新エネ促進法の補助金制度を活用したことが説明された。バイオガスは高濃度の排水を直径1~2mmの球形微生物(グラニュール)で分解するときに発生するもので、発生したバイオガスを脱硫し、ガスと水蒸気との反応で水素を作り、外部から導入した空気中の酸素と化学反応させ、発電するもの。燃料電池の発電量は220kw、平成10年に二億三千万円で設置し、現在は長期のデータ検証と発電目標単価を9円/kw以下にする改善に取り組んでいる説明があった。なお、現在の発電単価は9~13円/kwと変動があるようだ。また、実際にはバイオガスの発生が不安定(工場休みの時はゼロ)であること、グラニュールという微生物の温度コントロールなどの難題があった事が理解でき、今後このような環境循環型の発電が発展する事を期待したいと思う。

次に、ビールの歴史を迫力あるアストロビジョンで視聴し、工場の見学となった。原料のホップ、二条麦(粒が二つ)を発酵させ、ろ過し麦汁とする。次に酵母を加えアルコールと炭



燃料電池システムの前で記念撮影

酸ガスが発生する。これを若ビールと言い、さらに低温で約2ヶ月貯蔵する。(ひとつの貯蔵タンクは一人が毎日飲んでも2500年かかるとの説明があって、見学者全員が思わず苦笑)若ビールは酵母を除去するため、昭和52年から導入したセラミックフィルタでろ過する。すなわち生ビールの完成である。それ以前は60℃の加熱殺菌、ラガービールであった。仕上げは日本初の全自動倉庫で毎分1500缶と1000本(大ビン)/分の充填機で缶詰め、瓶詰め、梱包、保管、出荷される。なお、瓶詰めは最後に目視検査で異物チェックされる。ちなみに、千葉工場の生産量は200万本/dayである。

見学後、お楽しみの出来たての生ビールをごちそうになり、大満足の初参加でした。<チッソフィルター(株) 木村 明夫>

ニューメンブレンテクノロジーシンポジウム2001報告

日本膜学会と(社)日本能率協会主催の第18回ニューメンブレンテクノロジーシンポジウムが2月27日から3月2日にかけて港区の三田NNビルにて開催された。4日間、8セッションが組まれそれぞれ80人前後の参加者が集まった。このシンポジウムは日本膜学会の重要な資金源となっており、如何に集客できる内容で、かつ「最新」「膜」「技術」の話題とするかが企画委員の腕の見せ所となっている。最近の傾向として水道関連と環境・排水関連のセッションの注目度が高い。今回は水道;2セッション、環境・排水;3セッションと水・環境色を強く出し過ぎたと感じられたが、いずれのセッションにも多くの参加者があった。特に膜利用排水処理2セッションを設けた最終日には最も多くの参加者があり熱のこもったシンポジウムであった。

最終日の午前中のセッションでは、「不織布による下水活性汚泥のダイナミックろ過」と題して講演させて頂いた。この技術は、活性汚泥法の沈殿池代替技術として注目されている浸漬膜ろ過法を都市型大規模処理場へ展開する上で「ボトルネック」となっている課題を打破しようとして開発している技術である。膜ろ過法では必ずしも除去対象としていない生物代謝産物などによって膜ファウリングが発生するため、高い膜ろ過流速が得られないという課題に直面している。また、膜ファウリングを抑制するため、過剰な曝気循環流を必要としたり吸引ポンプが必要などと分離エネルギーもまだまだ高いという課題を持ち合わせている。これらの膜ろ過法のボトルネックを、少々のSSはリークしても沈殿池代替技術であれば良いだろうとの観点から、膜ではなく極めて目開きの粗い不織布を用いてその表面に緩やかな活性汚泥のダイナミックろ過層を形成させて、曝気槽と放流堰の水位差を分離エネルギーとして利用するだけの装置を狙ったものである。この研究は東京都下水道局と新日鐵(株)、日立金属(株)と弊社で実施しているものであり、次年度からは(財)下水道新技術推進機構のモデル事業として実用化のための実証評価に移行する。本技術の実用化が都市部既存下水処理場の高度処理化に貢献できるものと期待している。

昼からのセッションでは松本幹治先生をコーディネーターとして最新の4つの膜利用排水処理実施例が紹介された。最初は日東電工(株)代理店の江守商事(株)今村氏からの「耐汚染性RO膜によるリネン排水回収システム」の実実施例であった。洗濯排水の生物処理水を孔径0.2 μ mのMF膜で前ろ過し日東電工(株)のRO膜モジュールLF10で脱塩するものである。シリカ系ビルダーによるROスケール障害を避けるために洗剤配合の改良を含めてシステムが開発された。水回収だけでなく熱回収も効率よく実施されており、さらなる

普及が期待できる。続いて、日本フィルター(株)の斉藤氏より「MF膜によるめっき排水処理システム」と題して、自社開発の特徴ある大孔径MF膜モジュールを用いた「マイクロフロー」の実実施例が紹介された。MF膜モジュールはポリプロピレン製で平均孔径5 μ mを持ち、従来のMF膜では達成できなかった高フラックスが可能であり、超コンパクトな全自動型排水処理装置である。処理水質向上の他、省スペース、省力化が図れコスト低減に寄与し、既に70~80件の実績を有することであった。既存の膜モジュールに頼ることなく、メッキ排水処理に適した膜モジュールを自社開発してでも求めようとする姿勢と意気込みが伝わってくる発表であった。日本酸素(株)の宮澤氏からは「織布フィルターによる無機排水処理」として、海外で開発されたもので、連続したチューブ状に織り込まれた織布をスパイラル状に巻き込んだ1/2インチ・チューブラーモジュールの紹介があった。ダイナミックろ過作用を用い頻繁な逆洗をせずに高フラックスが達成できるということであった。最後は(株)荏原製作所の小島氏から「飲料製造工場における排水回収の実例」が紹介された。製造プロセスの熟知の上に構築された排水回収実施例であった。リネン排水回収で洗剤改良にまで踏み込んだ排水回収プロセスの開発と同様に、今後とも製造プロセスにまで立ち入った排水回収プロセスの開発が必要であることを示唆する報告であった。

質疑応答の時間では数多くの質問コメントがあり充実したセッションとなった。この質疑応答は質問カードに参加者の意見を書いて貰う方式を採用し、忌憚ない質問が出るよう工夫されている。面と向かってはなかなか言い出し切れない日本人の性格?を考慮したもので司会進行する者にとってはありがたいが、このような方式を採らなくても充実した質疑応答で盛り上がるシンポジウムにするのも企画者の役割であろうか。もう一つの反省は、参加者が同業メンバー主体でユーザーの少ないことである。競合他社とともに、事業体、民間ユーザーの多くの参加者が集まるシンポジウムで新技術を紹介できることが発表する側の楽しみでもあるのだから。

<栗田工業(株) 澤田 繁樹>

インド南部3都市での見聞とセミナー報告

2001年2月15-16日にインド南部のChennai(旧称マドラス:人口500万)市、ANNA大学にてseminarがあり、そこへ招待されて講演をした。6年ほど前から進められてきたドイツとインドの共同projectの年1回のseminarである。「Membrane Technologies for Water and Waste Water Reclamation」のアジア版会議には新聞記事(①)にあるように5ヶ国からの研究者が招かれていた。参加者はおよそ120人、Englishが公用語であった。ここへの招待は、7年ほど前に弊社へ技術指導に来たドイツのSeitz社の技術者であったMr.Florian Schindlerからのもので、昨年11月に連絡を受けていた。彼は、このproject GTZの現地責任者である。インドにおける水事情は極めて厳しいもので、浄水・下水の浄化問題はインド全土で発生している。その水不足・廃水処理問題などを膜利用によって解決しようとする考えが当然生まれてくるが、そのseminarでも議論されていたが伝統的手法から新技術への導入切り替えの困難が発展途上国ではわが国などに比較にならないほどあるようだ。小生は15日のseminarで2件報告した。「醤油火入れおりの膜濃縮濾過の基礎解析」と「MF膜モジュールの選定方法について」を解説した。ある面で場違いのテーマを披露したような気もしたが、基礎解析の考え方や膜モジュールの選択の応用例は共通する問題として認識してもらえたと思っている。講演の最後に、ポケットに忍ばせていた100mlのPET容器の醤油を見せて、講演の主目的はKikkoman醤油をインドに売り込みに来たことであると伝え、会場の笑いを誘った。16日夕方の最終sessionではパネル討論会がおよそ1時間半行われた。6人の一人として日本の食品工業における膜利用技術をLFPIの例などを入れて5分間ほど説明した。纏めとして、「いかなる産業におけるいかなる設備・システムにおいても、最適運転されているものがないと考えている。その前提に立って研究開発・応用の推進をする必要がある。」と化学工学出身者としての意見を述べた。タイから来た大学研究者2名が、三菱レーヨンのHollow Fiber膜を用いてピルの水処理関連のシステム研究をしている事を報告して関心と呼んでいた。二日間のSeminarでは日本の学会・研究会

Call to recycle water ①

FRIDAY FEBRUARY 16, 2001

Express News Service
Chennai, Feb 16: At the time of severe water shortage in the city, German experts have advised the Government to consider recycling of water seriously.

At the inaugural session of two-day seminar on 'membrane technologies for water and wastewater reclamation' jointly organised by Centre for Environmental Studies, Anna University and German Technical Cooperation Agency (GTZ), project manager G. Keke said several factors like rapid industrialisation, urbanisation and failure of monsoon had led to water shortage all over India.

The biggest challenge ahead was in identifying a viable technology for water treatment and recycling, she added.

Federal Republic of Germany consul M.K. Warncke said globally only 5 per cent of waste water was being treated and recycled.

Anna Varsity dean A.R. Shan-takumar also spoke. The two-day seminar is being attended by 120 participants. Experts from Germany, Thailand, Japan, Australia and Singapore will present their papers.

lon and failure of monsoon had led to water shortage all over India.

The biggest challenge ahead was in identifying a viable technology for water treatment and recycling, she added.

Federal Republic of Germany consul M.K. Warncke said globally only 5 per cent of waste water was being treated and recycled.

Anna Varsity dean A.R. Shan-takumar also spoke. The two-day seminar is being attended by 120 participants. Experts from Germany, Thailand, Japan, Australia and Singapore will present their papers.

るように5ヶ国からの研究者が招かれていた。参加者はおよそ120人、Englishが公用語であった。ここへの招待は、7年ほど前に弊社へ技術指導に来たドイツのSeitz社

の技術者であったMr.Florian Schindlerからのもので、昨年11月に連絡を受けていた。彼は、このproject GTZの現地責任者である。インドにおける水事情は極めて厳しいもので、浄水・下水の浄化問題はインド全土で発生している。その水不足・廃水処理問題などを膜利用によって解決しようとする考えが当然生まれてくるが、そのseminarでも議論されていたが伝統的手法から新技術への導入切り替えの困難が発展途上国ではわが国などに比較にならないほどあるようだ。小生は15日のseminarで2件報告した。「醤油火入れおりの膜濃縮濾過の基礎解析」と「MF膜モジュールの選定方法について」を解説した。ある面で場違いのテーマを披露したような気もしたが、基礎解析の考え方や膜モジュールの選択の応用例は共通する問題として認識してもらえたと思っている。講演の最後に、ポケットに忍ばせていた100mlのPET容器の醤油を見せて、講演の主目的はKikkoman醤油をインドに売り込みに来たことであると伝え、会場の笑いを誘った。16日夕方の最終sessionではパネル討論会がおよそ1時間半行われた。6人の一人として日本の食品工業における膜利用技術をLFPIの例などを入れて5分間ほど説明した。纏めとして、「いかなる産業におけるいかなる設備・システムにおいても、最適運転されているものがないと考えている。その前提に立って研究開発・応用の推進をする必要がある。」と化学工学出身者としての意見を述べた。タイから来た大学研究者2名が、三菱レーヨンのHollow Fiber膜を用いてピルの水処理関連のシステム研究をしている事を報告して関心と呼んでいた。二日間のSeminarでは日本の学会・研究会



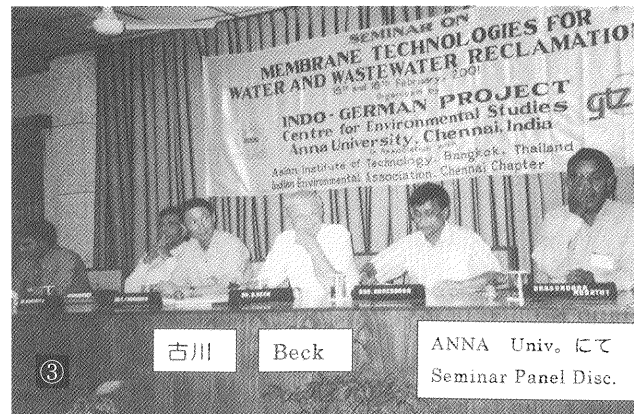
②インドにおける訪問した3都市の地理的な関係を示す。Singaporeから入国

ではあまり見られない質疑応答の活発さが目立った。小生も多くの方から休憩時間中に質問を受けたがフランクでなんでも尋ねる習慣があるようだ。この点、日本の若者の将来にやや不安が残るところだ。

11日	12:00成田→シンガポール(18:00)
12日	キッコマン・シンガポール工場訪問
12日	20:40シンガポール→チェンナイ(マドラス)(21:40)
13日	6:40 チェンナイ→バンガロール→マイソール(11:30)
14日	14:15 マイソール→(7hr:train)→チェンナイ(22:00)
15日	9:00-17:00 ANNA University
16日	8:30-18:00 ANNA University
17日	Holiday 21:40 チェンナイ→シンガポール
18日	成田着 夜

表1

表1が2月11-18日の旅程であるが、Singapore→Chennai→Bangalore→Mysore→Chennai→Singaporeの正味7日間であった。今回はSeminarを中心に説明したが、どこかでインドの魅惑について書かねばならないと思っている。当初、Culture shockを強烈に受けたが帰国前にはかなり静まった。そして、1ヶ月後には仕事かプライベートでまた行きたくなった気がする。インド料理・日本料理・ドイツ料理などで数日間を過ごしたが、醤油食文化の発展の可能性が改めて認識できた旅でもあった。ベンガル湾の海の幸は豊富である。インドでの醤油製造の可能性がMysoreの国立食品工学研究所を尋ねて見えてきた。この話を含めて次回はよりインドらしい話をしたい。 <キッコマン(株) 古川 俊夫>



③今回の主目的のSeminar風景。2月15-16の2日間の最後のPanel討論会。

海外視察・技術交流会計画 第2回 <台湾> 2001

〔日程案〕

	計画	滞在先	その他・備考
10/14(日)	成田出発 午後台北到着	台北	成田発11:30(日本アジア航空使用) 台北着13:55
10/15(月)	シンポジウム 講演・技術交流会	台北	台湾公官庁・民間技術関係者との情報交換 日本技術の紹介
10/16(火)	新竹での見学会	新竹	・台北～新竹(約100km) ・バス移動
10/17(水)	中南部での見学会	台中又高雄	・台北～中南部 ・バスもしくは空路移動
10/18(木)	台北に移動後成田帰国		台北発15:00(日本アジア航空使用) 成田着19:00

●スケジュール 詳細スケジュールを含む参加申込書の発送は5月下旬頃の予定です。

<計画推進の経過報告>

国際交流委員会では一昨年(2000年5月)のツアー『第26回アヘマ視察と欧州液体清澄化技術動向調査』に引き続き、2001年は『台湾との技術交流及び台湾企業視察』を検討している。この度の訪台企画については昨年夏より検討議題となっていたが、2000年シンポジウム期間に当会名誉会員である国立台湾大学の呂教授との情報交換により今回具体化することとなった。この件に関し昨年11月及び今年1月の国際交流委員会で検討を重ね、計画案を以下にまとめたので報告する。

1. 呂教授(国立台湾大学)からの訪台案

実際の『訪台の内容』について、呂教授より以下のような提案があった。『台北では、シンポジウムを開催し、①台湾の液体清澄化工業の現状報告、②日本の液体清澄化工業の現状と新技術の紹介、③技術情報交換会、④製品紹介及びパネル展示等を1～2日間で行う。その後、台湾北中部・南部に移動、⑤北中部ではLCD工場や食品/飼料工場、また南部の高雄では高雄市浄水場の視察を行う』というような提案があった。

2. 国際交流委員会訪台案

上記提案(呂教授からの)を踏まえ、国際交流委員会では、『視察したい企業及び訪台中の学会/展示会の見学』等を下記のように検討した。①飼料関係(食品残渣の有効利用)、②環境政策と動向/環境リサイクル事業の現状(ISO対応、食品国際規格への取り込み、規制の動向と現状)、③脱水ろ過技術、④軟水化技術(ボイラー用水等)、⑤外国技術の導入状況(工場見学、特に欧米からの技術導入状況)、⑥

台湾特殊事情と技術ニーズ及び日本への期待、⑦化合織、プラスチック、重合技術等の工場見学、⑧国立環境研究所、高雄浄水場、新竹の研究所見学、⑨環境関係・水処理関係省庁関係者との討議等を候補として取り上げた。今後さらに会員の意見を聞き検討を加えていく予定でいる。

尚、概略日程等、現段階での調査・検討事項を以下のように報告する。

3. 訪台の日程案

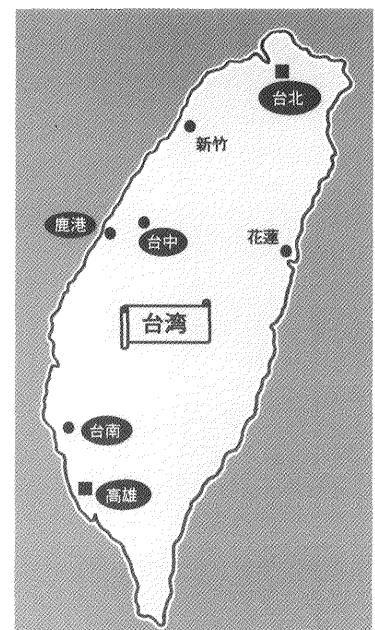
訪台日程について、呂教授より『概略日程は01年10月、シンポジウム期間は1～2日間位にしてはどうか?』との返事があった。10月という時期に関しては、平均気温が20℃前後と心地よく、訪台には最適だと思われる。シンポジウム期間に関しては、技術交流会及び親睦会を行い、最大2日間で十分と考えられる。

4. 参加者規模、概算参加費及び旅行運営

参加人数に関しては、呂教授から『おおよそ100～200人用程度のシンポジウム会場を用意できる』とのアドバイスがあったことから、日本側から20～30人程度の参加を予定したい。

概略参加費用は、15万円前後と予想される。

<神奈川機器工業(株)
卜部 礼二郎>



会員企業の委員会他参加状況

2001.3.15現在

会員名	A	B	b	C	D	E	F	G	H	I	会員名	A	B	b	C	D	E	F	G	H	I	
アクアス(株)											中尾フィルター工業(株)			○								
旭化成工業(株)	○		○								(株)ニクニ										○	
朝日工業(株)			○				○				(株)ニシヤマ			○							◎	
(株)荒井鉄工所			△								日清エンジニアリング(株)											
アルファ・ラバル(株)			○		○		○				日曹エンジニアリング(株)										○	
(株)石垣	○		○								日東電工(株)		○	○								
泉(株)											日本電工(株)											
(有)エニーエンジニアリング											日本フィルター(株)			○	○						◎	○
NGKフィルテック(株)			○								日本ボール(株)	○		○								
(株)荏原製作所											日本ミリポア(株)	○	○	○								○
(株)大川原製作所									○		日本リーロナール(株)											
大阪サニタリー金属工業共同組合	○										日本リファイン(株)											
(株)小川環境研究所											日本錬水(株)	○										○
オルガノ(株)											日本濾水機工業(株)										○	
神奈川機器工業(株)			○				○				ハイモ(株)			○								
(株)キッツ											日立プラント建設(株)	○									○	○
共和加工(株)	○										富士フィルター工業(株)	◎		○	○							○
キューノ(株)			○								ベカルトアジア			○								
クボタジョージフィッシャー(株)											ベックマン・コールター(株)											
(株)栗田機械製作所			○								(株)マキノ		○	○	◎							
栗田工業(株)							○				真鍋工業(株)			○								
晃栄産業(株)											三菱レイオン(株)			○							○	
工栄モスフィルター工業(株)			○								三菱レイオン・エンジニアリング(株)											
斎藤遠心機工業(株)			○								みづほ工業(株)											
桜エンドレス(株)	○				○						メルテックス(株)						○				◎	
ザルトリウス(株)			△	○							森永エンジニアリング(株)				○							
昭和化学工業(株)			○								U・S・フィルター・ジャパン(株)			○								
神鋼パンテック(株)						○					リオン(株)											
(株)新菱フィルテック			○								(株)ロキテクノ		○	○								
住友スリーエム(株)			△								☆アサヒ飲料(株)											
(株)セイシン企業								○			☆アサヒビール(株)											
大平洋機工(株)											☆味の素(株)											
大和紡績(株)			○								☆(株)伊藤園										○	
ダウ・ケミカル日本(株)											☆(株)加藤美峰園本舗										○	○
チッソフィルター(株)			○								☆キッコーマン(株)	○									○	○
月島機械(株)			○								☆麒麟麦酒(株)		○									
(株)テクノ大手											☆サントリー(株)											
(株)トーケミ	○		○								☆(株)山王											
東京製鋼(株)			○								☆新日本化学工業(株)											
東洋スクリーン工業(株)			○					○			☆ノニー(株)											
東洋紡エンジニアリング(株)											☆第一製薬(株)										○	
東洋紡績(株)			○								☆武田薬品工業(株)											
東レ(株)			△				○				☆東興建設(株)											
常磐(株)											*廣川産業技術研究所											○
巴工業(株)			○						○													
(株)トライテック	○																					

☆はユーザー会員の方、*は個人会員の方です。

A. 技術委員会 B. 規格・標準委員会 b. ろ過部会分科会 (△予定) C. 広報委員会 D. IT委員会 E. 行事委員会
 F. 国際交流委員会 G. 総務委員会 H. LCP分科会 I. 出版企画部会 ◎印は、担当理事

協力会員 松本 幹治(横浜国立大学):A,B,b,I/ 金森 敏幸(物質研):b/ 入谷 英司(名古屋大学):b/ 石川 雅紀(東京水産大学):H

企業紹介

株式会社 栗田機械製作所

弊社は、1930年7月創立され、以来フィルタプレス(加圧ろ過機)とその付属機器を製造・販売して参りました。特に世界に先駆けて1953年より開発を手がけた全自動フィルタプレスの製造台数は4000台を数え、斯界の注目を浴びるに至り、製造プロセスの固液分離機として、また汚泥脱水機として、リサイクル・リユースにも大きく貢献しております。

近年、顧客の設備動向は、低成長経済を反映して投資の効率化を最重点課題とし、環境面にも配慮したテクノロジーがのぞまれ、このようなニーズに対応すべく企業体質の改善をすすめて参りました。

昨年より、2001年事業計画マスタープランを策定し、あらゆる管理の基礎となる業績管理方法の見直しを行い、営業・技術部門をグループ化することにより、きめこまかいサービス体制の構築や、新製品・新技術の開発、透明性を高めた業績評価制度の導入により、ユーザーニーズに応えるべく地道な変革をおこなっています。

本会の一員として、皆様と共に業界の発展に貢献出来る様、努力してまいります。(榎本 武彦)

株式会社 トライテック

当社は、平成元年8月に水処理装置の設計・製作・販売を目的として発足し、以来一環して水処理装置の分野で事業を進めてまいりました。

純水・超純水用RO浴装置、電着塗料回収用UF/RO装置、各種医薬品および食品濃縮精製用UF/RO装置、調合無菌ろ過装置、排水脱塩用RO装置、灌水および海水脱塩用RO装置、含油廃水処理用UF装置といった幅広い分野において膜分離技術を用いた製品を数多く取り扱っております。近年、特に医薬品濃縮精製用UF/RO装置や調合無菌ろ過の分野においてはバリデーションを伴うソフト・ハード両面での提供実績も高くなっています。製作及びサービスの拠点を東京、大阪に配置し、顧客の多様なニーズに対応しうる体勢づくりを進めながら、信頼性の高い装置づくりをモットーに日々努力いたしております。今後とも製品を通じてますます地球に優しい企業として貢献しつづけていきたいと考えています。(横田 三雄)

オルガノ株式会社

めまぐるしく変貌し進展を続ける事業活動や生活様式の変化によって地球規模での環境破壊が進み、地球環境問題は人類の生存基盤に重大かつ深刻な影響を及ぼしつつあります。このような状況の下、我々は「水」に関する多くの課題に直面し、その対応として「水の高度な精製技術」と「地球環境に負荷をかけない優しい技術」の両立を求めています。

当社は1946年創業以来、水と共に歩み、水を理解する心を育みながら、その秘められた力を引き出すと共に有効に活用するテクノロジーに挑戦し続けています。

企業コンセプトとして「エコロジカリークリーン」をベースに、「産業」と「人」と「自然」の調和に貢献していきたいと考えており、それは次の5つの挑戦テーマで構成されています。

- ク リ ー ン ア ー ス : 地球の健康を取り戻す技術
- ク リ ー ン エ ネ ル ギ ー : 安定した社会基盤の創造
- ク リ ー ン テ ク ノ ロ ジ ー : 先端産業を支える技術提案
- ク リ ー ン ラ イ フ ス タ イ ル : 高機能商品を通じ地球環境とライフスタイルの調和
- ク リ ー ン マ イ ク ロ コ ス モ ス : きれいな水を通じた健康な自然とふれあえる世界の創造

(川端 雅博)

泉株式会社

当社は昭和22年に設立され、当初は機械類の販売が主体でしたが、現在では重布、ろ材、工業資材、土木資材、建装、機械、樹脂、フィルムと広範囲にわたる事業分野を確立し、あらゆる産業分野との接点を持つようになりました。それには関連会社23社を含め、生産から販売まで一貫した商品づくりを実現している「商社でありながらメーカーである」という、IZUMIのコンバーター機能が活かされている為だと思っております。その中で、機能資材事業部門(ろ材部門)では、環境関連部門として各種工業用乾式湿式フィルター類、及びその関連商品、カートリッジフィルターから医療用フィルター、超純水用フィルターに至るまで、各部門向けにフィルター類を製造、販売しております。

これからも「人と地球へのやさしさ」「環境へのおもいやり」等21世紀の大きなテーマの基に、商品づくりに努め、社会に貢献していきたいと考えています。(森本 啓介)

行事予定表

会員交流会 この度の会員交流会は、特にユーザー会員の皆様の多数参加を期待します。この交流会を1つの契機として、ユーザー会員が本会にどのような期待を寄せているのか、又ユーザー会員のためになるどのような会の運営を望んでいるのかを広く知る機会を持ちたいと思っております。詳細は別紙案内書をご覧ください。

日時:4月25日(水) PM4:00~PM7:00

内容:講演1題 PM4:00~PM5:00 鈴木基之(東京大学教授/国連大学副学長)

懇親会:PM5:00~PM7:00 **場所:**横浜国立大学

講演会

2001年第2回行事として下記の通り講演会を開催致します。2月のサッポロビール千葉工場の見学・講演会は参加申し込みが多く、会員の一部の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、6月講演会にもふるってご参加ください。詳細につきましては追ってご連絡致します。

日時:6月7日(木) PM1:30~5:00

場所:横浜プラザホテル(予定)

テーマ:「液体清澄化技術におけるエネルギー問題とその実例」

1. ESCO(エナジーサポーターティングカンパニー)の現状と将来
(荏原製作所:西村 省平)
2. 省エネルギーろ過システム(横浜国立大学:松本 幹治)
3. 食品精製工程における分離技術の実例(キッコーマン:古川俊夫)

編集後記

この度巻頭言を執筆していただいた国立台湾大学の呂維明先生の原稿は原文をお見せしたいほど美しい文字で書かれておりました。読者の皆さんはすでにお気づきかもしれませんが所々、難しい単語が使われていたため編集部にて若干の手を入れさせていただきました。しかし、内容の魅力はそのまま生きていると思っております。本当に原文をお見せ出来ないのが残念です。

編集/発行：日本液体清澄化技術工業会 広報委員会
住所：横浜市戸塚区上矢部町2107-3 〒245-0053
TEL (045) 811-1533 FAX (045) 813-9450
LFPIホームページ <http://www.lfpi.org>